



私とソフィア会と経鷲会

副会長 本多 義人 (S49 経・営)



振り返ると大学時代は随分と幼稚に過ごしたものである。経済学部に入ったものの、毎日の授業は高校の延長の様に思えてさして興味が湧かず、子供の頃から好きだった英語の授業が精々の楽しみだった。それも外人神父との会話がであった。脱出を考えていた一年生の夏、一寸した事が縁

で大泉学長と親しくなり急に上智が好きになった。先生とはよく二人で、こっそり色々の処にくだした。先生は無類の野球好きで、いつも野球部が勝つことを祈り、強くなることを願っておられた。

お蔭でやめようと思っていた学校と野球を4年間続ける事になった。先の事も考えず月並みの学部を選んだ事も、野球部を強くしたい一心で続けた事も今思うと全く幼稚な話である。しかも3年、4年と主将を引き受け、親しい仲間を学生会と体育会の長に推して結構陰で牛耳っている積もりでいたりしたからお笑いである。しかしそうゆう事のお蔭で学生の頃から当時のソフィア会の重鎮、遅塚、小寺、青山、速水、渡辺さん等大先輩の知己を得て大なる薫陶を受け、教室での学問以上の財産ができた。皆さん鬼籍に入られたが、古き時代の素晴らしいソフィアズだった。

こんな在学時代が下地にあって気が付いたらソフィア会の下働きをしていた。もう35年以上になるかも知れない。その間大学はハード面こそ変わったが精神は少しも変わらず、さすが上智である。一方ソフィア会は大きく変わった。先ずは渡辺慎介元会長、鈴木宣明元事務局長が礎を造り、諸橋晋六前会長がそれを見事に育て上げた。他大学に類を見ない会員皆仲良く、信頼に満ち溢れ、活動的で母校愛が強く誠に洗練された素晴らしい同窓会である。今や他大学の羨望の的である。これも元をたせば卒業生一人一人の品性豊かな人格、そしてそれを育んだ母校の教育の賜物だろう。

わが経鷲会も例外ではない。大学創立75周年即ち経済学部創立75周年の時、大先輩の品田元学部長、当時の内野学部長の肝入りで行われた記念大会の席で中島アキレス社長(当時)、大河原KFC社長(当時)の音頭で設立を決め翌年から経済学部同窓会としてスタートした経鷲会も既に13年を経過した。その間、歴代学部長を初め学部の先生方のご協力と初代会長伍堂先輩、川野現会長初め多くの幹事のご尽力により年々良い会に育ってきている。なにしろ各種ソフィア会の中で最も多くの会員を擁しているだけに、この会の行動がソフィア会に与える影響は実に大きい。即ち我々の活動、言動そのものがソフィア会のものである。この様な認識の上でわが経鷲会の運営を行い母校並びにソフィア会の為にも今後益々の充実と発展を果たして行きたいものである。

(経鷲会副会長)

経鷲会総会のご案内

総務委員長 八木 達郎 (S49 経・営)

本年も経鷲会第14回定時総会を下記の通り開催します。会議の後、皆様のためになる講演会と懇親会も用意されています。是非、この機会にアルマ・マートルにお出かけいただき、交流のネットワークを広げてください。

日時：平成14年11月16日(土)

1. 総会 14:00 於 上智大学3号館321教室
議題 (1) 事業活動報告 (2) 決算報告
(3) 事業計画案 (4) 予算案
2. 講演会 14:30 於 上智大学3号館321教室
講演者：IMF国際通貨基金アジア太平洋地域事務所所長 日野 博之氏 (S43 経・経)
演題：「グローバリゼーションはどこへ行くーIMFエコノミストの視点」
(上記で交渉中)
3. 懇親会 16:00 - 18:00 於 ソフィアズクラブ

会費納入状況のご報告とお願い

会計委員長 西村 達郎 (S49 経・営)

前回のエコノミアン22号(5/10発行)で、平成13年度(12/10~13/9)の年会費(2,000円)の送金者が前年比半分以下の442名に減少し、このままではエコノミアンの発行継続がピンチに陥るかも・・・との懸念を皆様にアピールいたしました。

この件につき、多くの方々から激励とご理解をいただき、平成14年度(13/10~14/9)の概算では「送金者数」が約1,200名に増加いたしました。有難うございました。

経鷲会の会員数は年々増加しておりますが、郵送料などの諸費用を乗り越えてエコノミアン発行を維持していきます。そのために、今回も会報に郵便局の「払込取扱票」を同封しましたので、どうぞ、会員の皆様のご理解とご支援を切にお願いいたします。





碁鷲会の発足にあたって

特別企画委員長 古屋 毅 (S32 経・商)



3年前の春の経鷲会サロンで、私が囲碁の話を持ち出しますと、会の皆さんで囲碁を趣味としている方が大変多いことがわかりました。これに気を強くした私は、自分の折り畳み囲碁セットをソフィアンズクラブに置かせてもらい、経鷲会の中に「囲碁同好会」をつくろうと思立ちました。

そんな話が次第に発展し、「オールソフィアンの集い」で「囲碁同好者コーナー」を設けたり、「オールソフィアンズ囲碁大会」を開催する運びとなります。そして、2000年12月2日が「第1回オールソフィアンズ囲碁大会」となりました。

実は、この度の碁鷲会（日本棋院上智大学支部）結成にいたるまでの経緯で、人のご縁というものがいかに不思議な力をもつものかと感じ入りました。その筆頭が利光大先輩（S22 経経）との出会いです。

前に一度お会いしているということで、オールソフィアンズ囲碁大会の名誉会長を引き受けていただこうと、川野会長と共に日本航空の役員室に利光様を訪ねました。40分くらい時間をさいてください、日本航空社長時代のご苦労話などされ、最後に上智の囲碁大会に対する支援を約束して下さいました。そしてご紹介いただいたのが日本棋院出版部長（当時は経理部長）の小澤良秋氏（S42 外西）でした。これが第二のご縁といえましょうか。早速、川野・堀井両氏と日本棋院に伺い、小沢氏も利光理事長からのご下命もあって大会支援を快諾してくれました。

第1回の大会は日本棋院八重洲囲碁センターで開催され、24名のソフィアンが参加、遠く室蘭から馳せ参じるメンバーもあり、熱戦が展開されてソフィア名人・本因坊・碁鷲を争いました。つづく表彰式・懇親会では、利光様自ら表彰状を各優勝者に手渡されました。ソフィアンで女流棋士の小山満鶴五段も駆けつけてくださり、大盛会でした。

第三のご縁は、NHK 囲碁番組の美人司会者で有名な稲葉裕子さんとの出会いです。昨年の2001オールソフィアンの集い「囲碁コーナー」の教室に、川野さんがつれてきてくださり、ソフィアン囲碁天狗に指導碁を打っていただいたのがはじまりです。教室を訪れたひとたちは、囲碁ファンならだれでも知っている稲葉さんを真近に見て、一日中会場は華やいだ雰囲気になりました。稲葉さんは、半蔵門のダイヤモンドホテルの中にある「囲碁サロン」の代表者で、私たちソフィアン囲碁仲間は早速その囲碁サロンの火曜日メンバーに入会し、1年余り常連としてそこに通っているうちに、いつしかそこが碁鷲会の活動の本拠となっていくたのです。

そうしたご縁のあるかたたちのご支援を得て、2001年12月1日に「第2回大会」（日本棋院市ヶ谷）、2002年5月25日には「オールソフィアンの集い」参加行事としてダイヤモンド囲碁サロンで大会を開催しました。いずれも30名を超えるソフィアン囲碁同好者が参加してくれました。

そんななかで、いくつかの要因から、碁鷲会を発展させて日本棋院の上智大学支部をつくろうという動きが出てまいりました。

一つは、囲碁大会参加者が40名近くになり、案内対象者が60名を超えてまいりますと、同じソフィアンでも出身学部が経済学部止まらず、文学部、外国学部など多岐にわたってまいります。また、メンバーの笠松氏のご尽力で碁鷲会のホームページができ上り、ソフィア会のホームページリンクの仲間入りをしました。そして、何といたって現在日本棋院理事長である利光先輩が囲碁普及活動に腐心されており、会員増強に取り組んでおられ、各大学にも支部があるので、この際理事長在任中に上智大学支部をつくって利光様の偉業を讃え、母校に花を咲かせようではないかという話になってゆきました。そこはソフィアン同志、先輩・後輩というメカニズムが働き、理屈や損得を抜きにして、囲碁という趣味と人のご縁による相乗効果で輪がひろがり、いつしか碁鷲会という母体を超えて進んでまいりました。

伍堂光雄氏（S32 経経・前碁鷲会会長）が初代支部長を引き受けてくださることになり、お陰で支部会員も24名と規定を超えましたので、9月中に申請を終え、10月1日から正式に「碁鷲会（棋院上智大学支部）」として発足し、ソフィア会の中の一グループとして活動してゆくこととなります。名誉顧問には利光松男様、そして特別顧問には本因坊で棋院副理事長の加藤正夫九段になっていただくことが決まっております。

碁鷲会の皆様方、「碁鷲会」も巣立ちの時がやってきたと受け止めていただき、今後ともご支援くださいますようお願いする次第です。（碁鷲会事務局）



定年後の仕事 中村正武 (S38 経・経)



「リタイアしたら毎日散歩して、犬と遊んで」と考えていた事も、一か月もしない内にあきてしまいました。仕事もない、他人から期待もされない毎日が、こんなにつまらないものだと思いつくのに時間は掛かりませんでした。

そんな時、老人介護保険が動き始め、ホームヘルパーが不足している事を知りました。この仕事なら私にも出来る。女性や若者にはではなく、この年の私に出来る仕事があるのではないかと、ホームヘルパー2級の資格を取得し、タイミング良く依頼が来て仕事につく事が出来たのです。

昔のように年寄り家族で面倒を看るとい時代から核家族化、少子化が進行して、家族内で老人を介護する人がなくなりました。夫婦がそろって居れば、元気な方が動けなくなった相手を介護するというケースや、たまたま子供と同居していても親が九十歳ならばその子供は七十歳近いという事で、いづれにしても老老介護（老人が老人を介護）で他人の力が必要となってきています。この世界に足を踏み入れ、寂しい老人、身寄りのない老人、貧しい老人、病で動けない老人、中にはパーキンソンや脳梗塞で倒れた五十代を思い出し、あれもしてあげたい、これもしてあげたいと言う気持ちが、毎日の私の仕事の励みになっています。ただ余り私の方が張切り過ぎる

と、相手は長く生きて来てご自分のペースをお持ちになって居る方たちなので、嫌がられます。相手のペースの中で私たちが何をお手伝い出来るかが老人介護だと思い頑張っています。そしてボランティアではなく、お金をもらって仕事をする事がプロへの近道と思いつくのですがもらって居ます。

ソフィアン諸兄の中で時間のある方は、老人介護の仕事に興味をお持ちになったらいかがでしょう。昔話の相手をしてあげる事も私たちの年代でなければ出来ない立派な介護の仕事です。

海外や多方面で活躍のソフィアンの多い中で、こんな定年後を送っている者も居るという事を知って貰おうかと思ひペンを取りました。(2002年9月、元日興證券)



世界銀行を退任して

伊地知重孝 (S38 法・法)



世界銀行には、1972年から定年退職する1999年まで27年間勤務した。入行時には日本人のいわゆるキャリアは8人、現在は200人近くになる。日本の最後の世銀借款が1967年。30年近くの間、日本が未だ途上国とみられた状態から世界第2位の経済大国になるまでを国際機関の特異な位置で経験したことになる。

この間、ラテンアメリカ、東アジアを除く殆どの地域を担当した。こうしたキャリアを積む上で、上智で学んだことの果たした役割は極めて大きく感謝に耐えない。殊に神学部で自分より遥かに頭のいい人達をみて、早い時期に謙虚になることを教わった。帰国子女を見て語学では追いつけないと悟り、こつこつ辞書をひいて毎日練習しようと決心したのも上智時代で、これは今でも続けている。留学先や世銀で萎縮せずにすんだのも上智のお陰と感謝している。

30年間、外から日本を見ての感想は二つ。第一は、指導者は細かい事までよく勉強し、体力も優れていないといけないこと。1968-81年のマクナマラ世銀総裁がその典型で、出張先でも儀礼上の公式行事は全て昼食時だけ、夜は膨大な資料と取り組んでいたし、毎日のジョギングも欠かさなかった。ずば抜けた秀才で、その力に満ちた指導力は一般職員から尊敬を常に集めていた。第二には、語学に自信がなくとも、経験が少なくとも、目の前にある問題に躊躇せず立ち向かう勇気を持つこと。日本人は何かにつけ日本の戦後の経験に基づかず哲学を論ずることが多いが、西ドイツの政府との交渉で戦後の経験を言われたことは一度もない。逆に1968年の学生運動のさなかに、20代の若者達が父親の年代に戦争責任の問題を突きつけ、旧い年代も最初は躊躇しながら、やがてドイツ民族としての戦時の清算に取り組むことになる。それは、結局は一人一人が問題に正面から立ち向かう勇気を持つか否かに集約される。

具体的な問題に取り組む前に政策の枠組みを決めてから、と言うのは正しい。しかし、日本では政策論議に割く時間が極めて多い。これは、世銀退職後に関係するようになったNGOの

世界で殊に顕著である。日本も含めて世界には今日この場で助けを必要としている人達で溢れているし、先送りが許されない問題が山ほどある。時間の浪費は金の浪費に等しい。現場に飛び込んでいって事の順位を間違えるほどには、大部分の我々レベルで扱う問題は複雑ではない。一般論を会議で論じていると、大事な仕事をしている名分がたつが目の前の問題を避ける言い訳にもなる。その陰には個人の見栄やエゴが見え隠れする。

中近東の格言は、沢山の仕事が目前にあったら、手を振り上げ、目をつぶって手を下ろした先にある仕事がお前の使命だ、という。頭がよく、他人より高い教育を受けたと自負する人達は、指導という名のもとに他人を支配したがる。上の格言は、自分を越えた力の前に頭をたれ、行く道の教えを乞えと論ず。上智で教えられた尊い教訓の一つとして、いまだに毎日を生きる上のよすがとしている。(平成14年9月18日、ヨルダンの首都、アンマンにて。)



「経済学部OB講座」を担当するに際して

古川 芳邦 (S47 経・営)

2002年度後期「経済学部OB講座」を担当するに際し、過日、経鷲会会長で経済学部OB講座を何度も経験された川野克美様と真友会(佐藤ゼミOB会)会長で同じくOB講座を務められた松本泰輔様にお会いし、お二人より貴重なご指導を賜る機会を得た。その折、川野様より小生OB講座のPRを兼ねて本稿のご依頼を受けた。以下、講座の目的・内容等を述べる。

科目名：(後) 産業論特講Ⅱ

副題：循環型経済社会と環境経営

日時：金曜日、5～6時限 (13:30～15:05)

(1) 目的・内容・進め方：

企業と地球環境が共に持続可能な発展をとげる為、環境調和型経営管理・製品に関わる世界の潮流・政府施策・企業のケース・スタディーを講義する。最先端の「マテリアル・フロー・マネジメント(エコノミーとエコロジーの両立を追求する)」を含め人・物・金・情報のフローを議論し、就職と実践に役立つ授業にしたい。

(2) 講義の概要：

1. Introduction (全般)
2. 地球環境(問題)について 地球温暖化問題など
3. 環境報告書と環境会計世界の潮流、日本政府のガイドライン、企業事例など
4. マテリアルフローの基礎概念 日本国のマテリアルフロー、企業のマテリアルフローの概要など
5. フローコスト会計 世界の先駆的事例(日東電工の事例)
6. Material Flow Cost Accounting, Concept and Application 授業は英語で行う。

Special Guest: Dr. Markus Strobel, Institute for Management and the Environment, Augsburg, Germany

7. 環境用語の演習 事前に環境用語を出題し、演習発表してもらう。
8. 地球環境サミットと京都議定書の今後の運用
9. 日本政府の海外への環境技術支援
10. 循環型社会形成推進基本法と国民一人一人の協働
3R (Reduce, Re-use, Recycle)
11. 環境マネジメント (ISO 等企業の管理体制)
12. 環境格付けの最新動向
13. 環境広告、就職活動へのアドバイス

上記の通り、今話題の地球環境の持続的発展と企業の環境経営をテーマに講義し、受講生に①企業が「環境と経済を両立させる」ためにいかに努力をしているか、②学生は地球人として「かけがえのない地球を守る」ためにいかに日々行動すべきかを強調するつもりです。皆様のご支援を宜しく申し上げます。(日東電工公需渉外部企画課長)



それは八ヶ岳から始まった

池谷 誠司 (S37 経・経)



JR 中央線を小淵沢駅でのりかえ、小海線の列車に揺られ、これから初めて挑戦する八ヶ岳登山への期待と不安に、気持ちが高ぶっていた。昭和 34 年、今から 43 年前のことである。大学 2 年の 8 月、かつらぎ会を主催するエルリンハーゲン師引率によるこの登山に参加した。松原湖駅で下車、同湖畔を半周して平坦な山道を 3 時間ほど歩くと稲子湯に着く。ここから迂回して透明な水を静かにたたえる白駒池で休憩し、白樺が林立する山道をたどって上智大八ヶ岳ヒュッテ前の空き地でファイアーを囲んでお互い肩を組み、山の歌の合唱が始まった。ここは 1,600 メートルの高地にあるため、ファイアーが消えると急に寒さが襲ってきたが、満点の夜空に無数の星が降り注ぐ光景は今でも忘れられない。

一昨年 8 月南アルプス縦走の最終日、赤石岳と荒川岳(悪沢岳)の間にある荒川小屋で見た夜空の光景はまさに 40 年前に見た八ヶ岳ヒュッテと同じで、しばらく茫然として感慨にひたった。

昭和 37 年卒業以来、鐵興社—東ソー—燐化学—千代田商工(勤務中)と転籍したが、燐化学の本社工場が富山県新湊市にあり、出張の機会を利用して平成 5 年 10 月台風一過の立山連峰の雄山(3,003 メートル)の頂上に立ち、360 度の眺望を満喫したのがきっかけになり、34 年ぶりに登山の魅力にのめり込むことになった。

親子 2 代ソフィアンである父(昭和 9 年卒)は学生時代の夏休み、故郷の富士宮に帰郷して富士山で強力の仕事や頂上の浅間神社で御礼、お守り売のアルバイトをしていたとよく聞かされていたが、平成 6 年の 8 月同窓の鈴木猛夫君と富士吉田から宿願の富士登山を果たした。

その父も 3 年前 89 才で帰らぬ人となったが、上智のサッカー

部創設のメンバーとして貢献したと聞く。せめてあと 3 年少し生きて今年 6 月日本中が大フィーバーしたワールドカップを観戦してから亡くなってほしかった。

さて私の百名山挑戦も今年 8 月で 43 座に到達し、これも宿願であった槍ヶ岳—穂高のピークハントの夢を実現させるべく体調を整えている。しかし百名山完登となると年間 6~7 座登るとしてあと 8~9 年はかかりそうである。もし達成可能なら百番目の山は赤城山(1,828 メートル)にしたいときめている。ここなら 2 時間 30 分ほどで登頂できるので、愚妻、子供、孫達に囲まれて、記念の祝杯を上げることが出来そうだからである。「八ヶ岳に始まり赤城山に終わる」これが私の山登りの夢である。(注) 八ヶ岳ヒュッテ周辺については、ソフィア会事務局長柳持氏にお願いしてお借りした“ソフィアンズ ナウ”掲載の赤羽孝久氏の記事(10 年前)と牧野敬三氏の「八ヶ岳ヒュッテ今昔」(4 年前の記事)を参考にさせていただいた。(千代田商工(株)取締役社長)



私の転職ストーリー

~留学生アドバイザーは私の天職

高野 靖子 (S63 経・経)



現在、東京大学大学院法学政治学研究科で留学生アドバイザーをしています。これは外国人学生を総合的に幅広くサポートする仕事です。入学希望者への受験案内から始まって、入学が決まると、ビザや住居の手続きを代行します。入学後は学習上および生活上発生する問題を一緒に解消し、進学・就職の相談も受け付けます。また、日本をよく知ってもらうために日本語勉強会を主催し、国会議事堂や裁判所などの見学会や懇親会も実施しています。

ここに至るまでには、大学時代の経験が大きく影響しています。私が所属した英会話サークル ESAS は国際交流活動が盛んでした。その中でも、アジア諸国の若者たちとの交流がとても面白く刺激的で、私は徐々にアジアに開眼し、留学先にフィリピンを選んだほどです。

卒業後、全国商工会連合会という公益法人に就職しました。初の女性総合職として、地域経済の活性化や広報などの仕事を精力的にこなしましたが、アジアの人々と直接関わる仕事がしたいという想いが募り、一大決心をして丸 3 年で退職しました。

そして、松下政経塾で私の大きな転機が訪れました。日本とアジア諸国との懸け橋になるのだという強い信念で試験に臨み、30 倍の高倍率をくぐり抜けて、1996 年に入塾しました。「日本におけるアジア人留学生が抱える問題の解決」が私の研究題目でした。年度末に研究活動審査会が開かれ、キーパーソンとなる東大教授が審査委員に含まれていました。タイミングよく、東大で留学生アドバイザーを募集することになり、その教授から採用試験を受けてみてはどうかと勧められたのです。